

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520448

研究課題名(和文)古記録によるアイヌ語の歴史的研究

研究課題名(英文)Historical study of Ainu by old documents

研究代表者

佐藤 知己 (Sato, Tomomi)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：40231344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：古記録によってアイヌ語の歴史を見直すことにより、アイヌ語の子音、母音体系、発音、アクセント、音節構造、語彙、意味について、古い時代の特徴を明らかにすることができた。とくに、未知の母音、子音の仮定、CVCC音節の仮定、母音の長短に対するアクセントの優越性、今日知られていない語彙の存在、言語地理学的知見の文献による実証、意味の変遷などである。

研究成果の概要(英文)：We could get various results about the history of Ainu by examining old Ainu documents: 1) accent may be older than vowel-length distinction 2) the possibility of the *CVCC syllable structure, 3) the possibility of an unknown consonant in Proto Ainu, 4) the possibility of at least one unknown vowel, 5) h of hu may have been pronounced as glottal, unlike the present bilabial fricative, 6) the existence of the vocabulary not known today, 7) chronological ordering of some words by linguistic geography can be supported by the study of old documents as well, 8) semantic changes may be attested by studying old documents (e.g. 'boy' 'adult man').

研究分野：言語学

キーワード：歴史言語学 アイヌ語 アクセント 長母音 文献 音節構造 言語地理学 意味変化

1. 研究開始当初の背景

(1) アイヌ語は無文字の言語であり、アイヌ語話者自身による古い記録がなく、アイヌ語の歴史の変遷はほとんど研究されていなかった。日本人を含む外国人による古い記録はこの空白を埋めてくれる貴重な資料であるはずだが、これまでは危機言語であるアイヌ語のフィールド調査が優先されて、古記録の分析はほとんど手つかずのままであった。特に、現代のアイヌ語資料と異なる点が多い最古期の古文獻についての研究が不十分であるために研究の土台が不足していた。

(2) アイヌ語の歴史的考察については、服部(1967)の方言の比較研究に基づく指摘があるが、その成果を古記録、内的再構、言語地理学、類型論のような他の歴史的手法も考慮に入れて体系的に検討する試みはこれまでなされていなかった。

2. 研究の目的

古記録、特に最古期である17世紀初頭以前のアイヌ語を記録したと思われる資料を中心として、この時期のアイヌ語の特色を明らかにし、以後のアイヌ語の発達について鳥瞰的な展望を得る。またそれらの知見を比較方法、内的再構、言語地理学、類型論から得られる知見と組み合わせる体系化する。

3. 研究の方法

(1) 成立年代、筆者が明らかな最古の文献(空念筆録、「狄言葉」(1704))の用字法を徹底的に分析し、その表記上の特色を明らかにし、そこから推定される現代のアイヌ語と異なる音韻、音声上の特徴を抽出する。また、文法、語彙、意味についても現代と異なる諸特徴を抽出し、この時代のアイヌ語の特色を推定する。

(2) 年代が判明している文献の分析を足がかりとして、ほぼ同時代かそれ以前と思われるが年代や筆者が不明である他の資料を研究し、同様な特徴が見られないか検証し、1700年頃以前のアイヌ語の特徴を推定する。

(3) 以上から得られた結果を、これ以後の文献の特徴と比較し、また、他の歴史言語学的手法から得られる結果と比較しつつ、アイヌ語の17世紀から今に至る変遷を体系化する。

4. 研究成果

(1) アイヌ語史を解明する上で重要な年代が判明している最古の文献である「狄言葉」(1704)(福井市立歴史民俗博物館)の分析から推定される古いアイヌ語の主な特徴は以下の通り。

1) pirka「良い」の r はほぼ常に「る」と書かれているのに対し、sir「天気」、cir「鳥」のような形式における r は「り」と書かれている。このことから、pirka の発音が現代とは異なっていた可能性があることが推定される。この場合、なんらかの子音(*H)が介在していたことが推定され、*piHrka のような形式であった可能性が考

えられる。このことは、古い時代には*CVCC という音節構造を仮定する必要があることを示唆している。

2) hunpe「クジラ」を「くんべ」と表記している例があることから、この時代の発音は [hu] で、現代のような [Φu] ではなかったと推定される。この推定は、日本語 [Φuri]「振り」がなぜ huri ではなく puri と借用されるのかを説明する上で有用である。つまり、古くは現代のアイヌ語の /hu/ は [hu] であったため、日本語の [Φu] を借用する場合、pu が用いられたのだ、と説明することができる。

3) kema「足」を「てま」のように表記した例があることから、古い時代のアイヌ語の ke は日本語の「け」よりも口蓋化の程度が低い、日本語話者には耳慣れない音([k^e]に近い音か)であったことが推定される。

4) repo「中央へ入れる」を「れんほう」と表記した例がある。repo は rep「沖」、o「入れる」と分析され、一般的には第二音節にアクセントが来ることが予想されるが、実際には第一音節にアクセントを持つ例外的な形式である。これまではその原因が不明であったが、「れんほう」の「ん」はなんらかの子音が古い時代にあったことを示すものと推定される。おそらくこの子音は、pirka の考察で仮定した *H と同じものと推定され、*reHp のような *CVCC という音節構造が仮定される。

5) 「おな多ら」(父殺し)、「おなバ者」(母殺し)、「者らさん多」ひけ連(空腹である)、「な可らてい」(久しぶり)のような、現代には見られなかったり、少し形が違っているものが散見される。これらは古い時代の語彙的特徴をなすものである可能性がある。

6) 「おつかひ」は okay「男」に該当するが、「若い男」を意味すると思われる訳語が付けられている。これは、この語の意味が、「少年」から「成人男子」に変化したことを示唆している。

(2) 近年、その存在が知られるようになった「狄さへつり」(もりおか歴史文化館)は、筆者、年代が不明であるが、表記や内容から、これまで知られている最古層に属する資料とほぼ同時代(18世紀初頭以前)のものではないかと推定される。

1) pirka の r は一貫して「る」に相当する仮名で表記されている。これは「狄言葉」に共通する。

2) hayokpe「鎧」を「はよ川婦」と表記しており、pe に「婦」が当てられている。これは、古い時代には、*hayokp のような *CVCC という音節構造が存在したか、[hayokpə] のように中舌母音が語尾音添加された形式が存在したことを示すものと考えられる。このような特徴は、アイヌ語最古の文献と推定されている「松前ノ言」(天理大学附属図書館)にも見られる。

3) 「おつかい」(童)のような例は、okay「成人男子」がかつては「少年」という意味

を表していた、という(1)の推定を裏付けるものである。また、「お累たら」(悪敷言事母)、「おなば」(悪敷言事父)さんたけ(空腹)な可らてい(久敷)は、(1)において古い時代のアイヌ語の意味・語彙的特色としたものと一致している。

4) (1)の「狄言葉」の研究で明らかになったように、アイヌ語の表記に主として用いられる仮名と日本語の表記に主として用いられる仮名が異なっている事例があるが、主要なものが「狄さへつり」でも一致している。特に、「お」、「志」、「婦」はアイヌ語の表記に主として用いられる仮名であり、この傾向は年代が不明なアイヌ語文献の年代を推定するのに役立つ可能性がある。

(3) 最古層に属する資料から得られた分析結果と、比較方法、内的再構、借用、言語地理学、および他のより新しいアイヌ語文献との比較によって得られる主な知見を統合して、アイヌ語史の流れをまとめると概略以下ようになる。

1) アイヌ語の歴史についての最重要な仮説の一つは樺太方言と北海道方言を対象とする比較方法を用いた服部(1967)による祖語におけるアクセントの欠落と、それに代わる母音の長短の対立の仮定である。服部は母音の長短を有する樺太方言がこの点では祖語の特徴を保存している、とする。(1)、(2)で詳細な分析を行った最古期に属する文献においても長母音を表記したとみられる例が相当数確認でき、しかもそれらは CVCV 型で語頭に例外的アクセントを有する現代の事例とほぼ一致する。このことは比較方法による推定が文献によって例証を得たと見ることができがこの仮説には重大な問題点がある。すなわち、この仮説に従えば、アイヌ語に借用された「杯」に対しても、アイヌ祖語では*tuuki のように長母音を仮定しなければならず、借用先の日本語にはない長母音がいかにして生じたかの説明が困難になる。また、樺太方言の合成語の中には自立語の CVV に対し、付属形式の CV という交替形を有するものがあり(nii、-ni「木」)内的再構によれば短母音を持つ付属形式が古い形ではないかと推定すべき根拠がある。したがって、祖語における母音の長短の対立の仮定は慎重であるべきであり、古文獻にあらわれる「長母音」は余剰的特徴である可能性がある。この余剰的特徴が樺太方言では母音の長短の対立に発達したとみられる。すなわち、樺太方言では音節末閉鎖子音がすべてhに変化したため、CVhCV(語頭にアクセントを有する)と CVCV で語頭に例外的なアクセントを有する形式とで弁別を保つことが懇談となったであろう。それが主たる契機となって本来は余剰的特徴であった長さが弁別的な機能を獲得したとみらるべきであろう。なお、長母音発生の契機となったとみられる CVCV 型であるにもかかわらず第一音節に例外的アクセントを有する一連の形式は、古くは

(1)の1)で仮定した*Hを有する*CVhCに由来するのではないかと推定される。

2) 服部(1967)は音法則の例外を説明するために自らの仮定した*CV、*CVV、*CVCのいずれでもない*CVVCという音節型を意図せずして仮定しているが、この音法則の例外は資料的制約によるもので、これ自体は*CVVCの仮定の根拠とすることはできない。むしろ、(1)の1)、(1)の4)で指摘した古文獻から得られる例証を考慮すべきであろう。そして、*CVVCではなく、1)で仮定した*CVhCをここでも仮定すべきであろう。

(4) 意味、語彙の変遷の事例については(1)の5)、6)などで触れたが、古文獻の研究は言語地理学的研究と相まってアイヌ語史の解明に資するところがある点明らかとなった。中川(1996)はhapo「父」という形式を有する千歳方言は、かつては北東部方言と同じhanpe「父」という形式とhapo「母」という形式であったが、類音牽引によってhapo「父」という語形が生まれたとする。18世紀初頭の主要な古文獻では、実際、hapo「母」、hanpe「父」に相当する形式の組を記録したものが多く、この事実は中川の推定と矛盾しない。ただし、hapoという形式が生まれたとみるべきでなく、母を意味する新しい形式(totto)の登場によってhanpeが押し出され、hapoが「母」の意味を担うようになった、とするのが妥当であろう。

(5) 今回、明らかになった側面を中心に述べると、アイヌ語の歴史的変遷の大きな流れとして、少なくとも18世紀初頭までは、アイヌ語には*CVCC(*CVhCを含む)という音節構造が存在し、現代のアイヌ語とは大きく異なる様相を示していたが、この時期、急激な変化が起こり、18世紀後半には既にその区別は大部分失われと推定される。また、それに伴って、語彙、意味の面でも相当な急激な変化を蒙ったものと考えられる。

引用文献

服部四郎「アイヌ語の音韻構造とアクセント」『音声の研究』13、1967年、40-56。

中川裕「言語地理学によるアイヌ語の史的
研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2: 1996年、1-17。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

佐藤 知己, A Classification of the Types of Noun Incorporation in Ainu and its Implication fo Morphosyntactic Typology, *Crosslinguistics*

and Linguistic Crossings in Northeast Asia,
Studia Orientalia 117. (招待有) 2016, 83-94

佐藤 知己、アイヌ語の合成語のアクセント規則とその例外について、アイヌ語研究の諸問題、(招待有)、北海道出版企画センター、2015、1-13

佐藤 知己、宝永元年空年上人筆録アイヌ語彙狄言葉の仮名・音韻対応表、北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 (21)、(査読有)、2015、1-25

佐藤知己、宝永元[1704]年空念上人筆録アイヌ語「狄言葉」の言語学的特徴、北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要 20、(査読有)、2014、1-133

佐藤 知己、アイヌ語千歳方言におけるsiranの用法、北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要 19、(査読有)、2013、1-19

佐藤 知己、アイヌ語の現状と復興、言語研究 (142)、(査読有)、2012、29-44

[学会発表](計6件)

SATO, Tomomi, How to Compensate for the Lack of Conversational Data in the Study of Ainu?. Hokkaido-Helsinki University Joint Session, March 3, 2017, (Helsinki, Finland)

佐藤 知己、言語史の研究方法与アイヌ語史の諸問題、日本歴史言語学会 2015 年大会講演、(招待有)、2015 年 12 月 19 日、北海学園大学(北海道・札幌市)

佐藤 知己、アイヌ語の主要古文献とアイヌ語史の諸問題、国立国語研究所「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究、2015 年 12 月 5 日、国立国語研究所(東京都・立川市)

佐藤 知己、アイヌ語の抱合とアクセント付与の問題、言語地域としての北東アジア及び環北太平洋、2015 年 8 月 20 日、国立国語

研究所(東京都・立川市)

佐藤 知己、アイヌ語の抱合の分類と語形成類型論に対する示唆、北東アジアにおける通言語学と言語的交差、2014 年 11 月 29 日、国立国語研究所(東京都・立川市)

佐藤 知己、アイヌ語の抱合の分類とその言語類型論に対する示唆(招待有)、国際シンポジウム「世界の言語における複統合性」、2014 年 2 月 20 日、国立国語研究所(東京都・立川市)

[図書](計1件)

加藤重広、佐藤知己、情報科学と言語研究、星雲社 2016 年、248. ISBN:4434216708

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 知己 (SATO Tomomi)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号： 40231344

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()